週間天気

	2	15	18	21	24	あす																		
岡山						28 20 30	29日(月)	27 19 30	30日(火)	24 20 60	1日(水)	28 22 50	2日(木)	30 21 30	3日(金)	29 21 40								
津山						26 19 30	29日(月)	27 18 30	30日(火)	23 18 60	1日(水)	26 20 50	2日(木)	28 19 30	3日(金)	27 19 40								

のち　一時・時々　5ミリ未満　5ミリ以上

数字(上)最高気温 (下)最低気温
丸囲みは降水確率
白ヌキは50%以上
↘は正午の風向き
矢印なしは無風

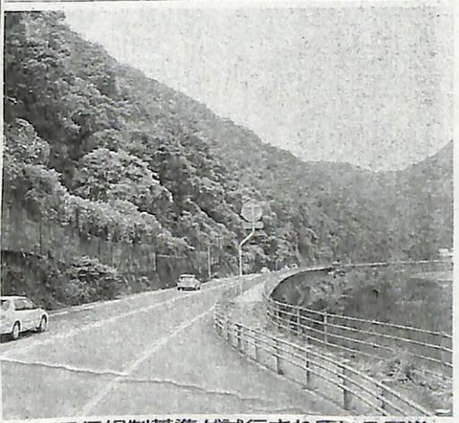
こよみは下に掲載

未来のオフィスを創造する
クラブン株式会社

岡山

雨量」通行止め基準に

号で試行 ゲリラ豪雨対策



たな通行規制基準が試行されている国道
=北区で

基準に、ゲリラ豪雨など短時間に集中的に降る場合でも通行止めを実施できるようにした。

近年、1時間に50ミリ以上の豪雨の発生が各地で増加傾向にある。同省は、こうした局地的な大雨でも被害を最小限にできるよう、今月から順次、全国の18側1車線で、旭川沿いの山が川まで迫った場所を走る。過去にのり面が崩落して片側交互通行になったこともあった。

これまで、連続雨量が200ミリに達した場合に通行規制していたが、過去の災害時には連続雨量が基準値に達さず、対応が遅れたと

口唇口蓋裂 連携して治療

岡大病院にセンター 患者の負担軽減

岡山大病院（北区鹿田町2）は、生まれつき唇や口の中に裂け目がある口唇口蓋裂を院内の複数にまたがる分野の医師らが連携して治療にあたる「口唇裂・口蓋裂総合治療センター」を県内で初めて開設した。患者の情報を院内で共有し、総合的・継続的な治療が施せるため、患者の負担軽減にもつながるという。

口唇口蓋裂は、胎児期に唇や上顎の形成がうまく進まず、口の周辺が裂けた状態で生まれてくる先天性の疾患。修復手術や言語訓練などを受ければ外見的に分からず、発音も改善されて機能的な障害はなくなるという。日本では500～600人に1人の割合で生まれるとされる。

治療には、出生時から成人するまでの長期間、多岐にわたる分野の受診が必要で、複数の病院や診療所に通わなければならないこともあり、時間的・経済的負担が大きくなるという。5月に開設された同センターでは、矯正歯科や口腔外科、形成外科などの各専門医が連携し、手術だけでなく、食事や話し方などについてもアドバイスなどが受けられる。

センター長を務める上岡寛教授は「患者が動くことなく、医師が治療に行ける。より安心して治療を受けられる環境作りに努めたい」と話している。

【瀬谷健介】

不要ピアノ
高価買取り
親切な楽器の総合デパート
トヴナガピアノ店
玉島中央町（支所南100メートル）
☎086(526)4028(代)

迷い犬 ツイッターで

保

総社市
県動物愛
で保護し
短文投稿
ーで配信
公式ツイ
が、県内
試みという

県内の
山、倉敷
保護し、
犬の特徴
る。総社
では年間
が保護さ
方不明に

高梁川流域

あす 倉敷で

高梁川流域の市民団体や企業家らが流域の自然や歴史、文化などを学ぶ一般社団法人

下校する児童の見守り活動にあたる「加茂学区安全・安心ネットワーク」のメンバー＝北区津寺で

人口当たり全国1位

根付く防犯ボランティア

児童の登下校の見守りや地域のパトロールなどに携わる「防犯ボランティア」が県内で根付きつつある。県警によると、県内のボランティアの数は昨年末現在、10万9437人で10年前の約7倍。人口1万人当たりでは560人余りとなり、2位に100人以上の差をつけて全国47都道府県中、トップを誇る。県警の地道な働きかけが実り、「地域の目」としての役割を果たしているが、高齢化などの課題も抱える。

【林田奈々】

10年前の7倍 10万人に

地域の安全 自ら守る

高齢化進み 活性化課題

「気をつけて帰れよ」。北区の加茂小学校区で活動する「加茂学区安全・安心ネットワーク」の熊澤巧祐さん(59)は、学校そばの路上で下校する児童たちに次々と声をかけた。見知った顔に児童も安心した様子で「こんにちは」と笑顔で返事し、家路を急いだ。

ネットワークは2006年に町内会や婦人会などを基盤に、地域活動全般を共同で行う組織として発足した。現在、防犯部会のメンバーを中心に、約100人が定期的なパトロールなどに携わる。下校時間に合わせて青色灯を付けた「青パト」を走らせ、夜間の見回りも行う。活動時にそろって身に着ける帽子がトレードマークだ。

当初、「そんなことは警察の仕事では」と批判的な声もあったが、無理強いすることなく、集まれる人が気軽に活動に参加できるようにしたことで続いてきた。活動に加わる主婦、脇本和子さん(59)は「雑談をしながら歩くのは健康にもいい。楽しみとしてやっている」とにっこり。住民の理解も進み、見回り中にねぎらわれることもしばしばだ。

終了後には、「道路に不審車両はないか」などの項目が並ぶ独自のチェック表も付ける。会社員の長尾和弘さん(61)は「毎日続けていると、地域に変わったことがあるとすぐ分かる」と心強い。

県警が、ボランティアの数を増やそうと力を入れ始めたのは04年からという。事件の認知件数が増え、警察だけでの防犯にも限界が見えた。自らの安全は自らの力でも守ってもらおうと、警察官が地域に出向く出前講座などで積極的に働きかけた。

04年末に373団体で1万5545人だった人数は12年末には1316団体まで増え、人数も10万人を突破。もたらされる不審者情報などは防犯情報を配信する「ももくん安心メール」などに反映され、過去にはパトロール中の通報によって訪問型の悪質商法の被害を防いだこともあったという。県警生活安全企画課の杉田理佳課長補佐は「地域に根差し、常に見守ってくれるお陰で地元の安心感がぐっと増した」と意義を語る。

一方で、半数以上が60歳以上で、メンバーの固定化と高齢化が進む。いかに新しい人を引き入れ、活性化するかが大きな課題だ。県警は、大学生を中心とした防犯ボランティア団体を発足させ、高校生を対象にしたボランティア体験なども試みている。杉田課長補佐は「PTAなど子育て世代にも興味を持ってもらい、参加を促したい」と話す。